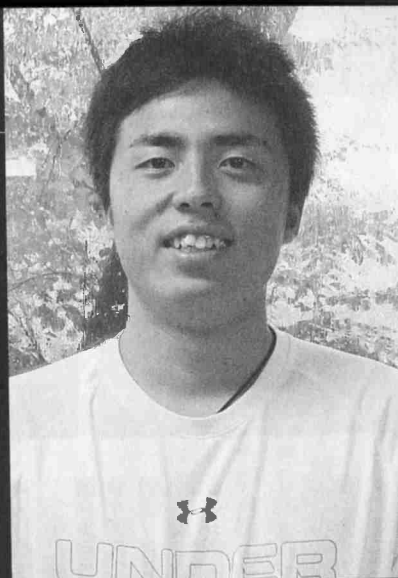


Seigi Tanaka

田中正義

創価大学3年・投手

昨春に突如出現した来秋ドラフトの目玉候補 右肩痛に泣いた高校時代から大学で見事変身



田中正義(たなか・せいぎ)

投手-186センチ88キロ右投右打-1994年7月19日生まれ、神奈川県横浜市出身。小学1年から駒岡ジュニアーズで軟式野球を始め、中学時代は硬式野球の川崎中央トルシニアに所属。創価高では1年夏からエースナンバーを背負うも秋に右肩を痛め外野手に転向。3年時は4番・外野手兼控え投手として西東京大会4強。創価大進学後に投手へ本格復帰し、2年春に鮮烈な活躍を見せ大学日本代表入り。3年夏の大学日本代表でもエースを務めた。

これまでの所属チーム&経歴

小学校
駒岡ジュニアーズ(神奈川県/軟式)
1年時から野球を始め、2、3年生からはずっと投手をしていた

中学校
川崎中央トルシニア(神奈川県/硬式)
目立った実績はないが、中学3年間で身長が25センチ伸びる

高校
創価高校(東京)
1年夏に背番号「1」を背負うも、秋に右肩を故障し外野手に転向

大学
創価大学(東京新大学リーグ)
2年春に最速154キロの剛速球を披露して一躍ドラフトの目玉に

高校時代は右肩の故障に泣き、外野手に転向。そのため大学では故障をしないよう、大事に起用されている

取材・文=高木遊

直訴して投手復帰

昨春、田中正義投手はアマチュア野球ファンを驚かせる鮮烈なデビューを果たした。

全日本大学野球選手権1回戦・佛教大戦に先発した田中投手は、初回から150キロ台の剛速球(最速154キロ)を連発し、無四球完封勝利を果たす。その後も全国の強豪相手に好投を続け、チームを4強に導いた。この活躍に、プロ球団のスカウトたちは今年(2014年)のドラフトでも1位指名だ」と声をそろえた。

また大学日本代表として参加したハイレム国際大会でも17回を自責点0に抑え、今春のリーグ戦ではメジャー複数球団のスカウトや上層部までも視察に訪れたほどだ。そして、今年6月に行われた大学日本代表とNPB選抜との試合では、プロの若手有望株を相手に庄巻の7者連続三振を奪い、今度こそプロ野球ファンにも衝撃を与えた。そんな田中選手だが、驚くことに高校時代は外野手をしてきた。創価高1年の夏にいきなりエースナンバーを背負うも、9月に右

肩の関節唇を痛め、以降は外野手としてプレーしていたのだ。

3年夏前に故障したエースの状態が思わしくなかったため、投手に復帰したものの、登板は2試合で4イニングのみ。基本的には「4番・センター」でスタメン出場し、主軸として主将としてチームを引っ張ることに力を注いだ。だが最後の夏に、わずかも登板を果たしたことで、忘れかけていた気持ちに再び火がついた。当初は不安のほうが大きかったという田中投手は、当時の心境をこう語る。

「ピッチャーをまたやらせてもらえると決まったときは、うれしきより、大丈夫かな? という気持ちのほうが強かったですね。投球フォームも忘れていたぐらいでしたが、投げてみたらストライクが入ったんです(笑)。それだったら、大学でもできるんじゃないかなと思って、大学の練習会に参加した際に、ピッチャーをやりたいです」と直訴しました。

こうして田中投手は、自らの意志で投手への本格復帰を決めたのだった。

田中投手の ココがすごい!

素顔の 田中投手



普段は天然でマイペース。吉本新喜劇などお笑いも好きで小粋なファンだとう。一方で野球になれば「調子によっては自信がないときもあるでしょうけど、バックやベンチにそうした姿は見せません」と佐藤コーチ。



③精神力

緊張感のかかるマウンドでも持ち味を生かした投球ができ、注目度が高まっても惑わされない芯の強さがある

②全身のバネ

「馬のように跳んでいるような走り方をすると佐藤コーチも話すように、走る姿からも全身のバネを感じる

①剛速球でも 制球力が安定

最速156キロの球速を誇りながらも、球が荒れることは少なく、制球力が安定しているのも大きな強みだ

田中正義伝説

NPB選抜戦での7者連続三振は、テレビ放送もあったため反響が大きく、スポーツ紙の一面も飾ったほど。それでも田中投手は「ヒジから先の感覚が悪く、調子はよくなかった」と話した。潜在能力はまだまだ底知れない。

徹底した基礎づくり

「投げる姿と走る姿を見て、お一つ、つて思いましたよ」

田中投手の第一印象をそう振り返るのは、創価大の佐藤康弘投手コーチだ。これまで小川泰弘投手(ヤクルト)を筆頭に、多くの好投手を育ててきた佐藤コーチは、その素材が一級品であることにすぐに気づいたという。

一方で一投げ方がよくなって、このままではケガするなと思いましたが」と語る。

当時の田中投手は筋力がなく、トップを作った際に腕がたためなかつた。それでいて腕が強く振れてしまつたので、肩に負担がかかり、故障につながっていたという。

そうしたこともあり、大学1年の間は、体づくりとケガをしないフォームづくりを徹底的に行い、公式戦には一切投げなかった。

そうした地道な積み重ねが、昨春からの大躍進につながるのだが、そこには田中投手のひたむきな姿勢もあると話すのは、創価大の岸雅司監督だ。

「今後彼にどんなことが待ち受け

これからの田中投手

飛び抜けた身体能力はもちろんのこと、精神面ではマイペースな部分と、芯の強さを併せ持つ田中投手。今年、活躍することとしている。活躍するに、体には細心の注意を払ってケアしてほしい。本人も周囲も「まだまだこんなものではない」と話そうように、伸びしろは十分。球史に残るような大投手への道を一歩ずつ着実に歩んでいってほしい。

ているかは誰もわかりませんが、悪い人間には絶対にならないはずですよ。肉体的な素材だけでなく、素直で、心の素材、も備えていますよ」

また岸監督、佐藤コーチともに、「活躍しても人間が変わらない」と話し、それは小川投手に似ていると口をそろえていたことが印象的だった。

投手に本格復帰してわずか3年足らずで、これだけの驚きを見せてくれる田中投手。

来秋のドラフト1位候補として、これからさらに注目は高まっていることだろう。だが、周りに惑わされることなく、田中投手なりのペースで成長を続け、さらに私たちに驚かせてほしい。